

「励まし」と「対話」を大切にした授業づくり
—子どもたちの自尊感情を育む道徳科の授業実践—

兵庫県芦屋市立打出浜小学校
教諭 井口 知奈美

1. はじめに

私は、子どものころ人前で話すのがとても苦手だった。発表には消極的で、「間違っていたらどうしよう」、「先生、私を当てないで」とびくびくしながら小さな声で発表するような子どもであった。そんな中、小学校4年生の時の担任の先生が「間違っても大丈夫だよ。教室は間違ふところ。」と何度も何度も言ってくれた。その言葉が当時の自分の励みとなり、少しずつ経験を積み重ねる中で自分から人前で話せるようになっていった。その時の先生にかけていただいた言葉を今でも鮮明に思い出す。そんな幼少時代を過ごしてきた私が、教師になり早くも5年目を迎える。今まで、クラスの子が昔の自分と同じように、「間違っていたらどうしよう」と不安げに発表する子を何人も見てきた。今度は教師である私が、「間違っても大丈夫だよ。教室は間違ふところ。」と子どもたちに伝え、安心して学び合える教室を作ることが大切だと実感しているところである。

2. 主題設定の理由

(1) 実践校の現状

本校は、兵庫県芦屋市の南東、海に面した埋立地に位置する。今年で創立38年、全校児童498名の中規模校。創立以来、地域の学校として見守られ、あたたかい雰囲気を感じさせる、地域に根差した学校である。児童はとても人懐っこく、「子どもらしい」面を持っているが、その中には、しんどい背景を抱える子どもも少なくない。校区には「福祉型障害者入所施設」があり、その施設から通学してくる子もいる。「別にいいし…」「どうせ俺なんて…」と今にも学びのシャッターを下ろしてしまいそうな子どもたちも多い。このような、とりわけ自尊感情が低い子どもたちをいかに集団の中で育てていくのが課題となっている。

昨年度、本校は兵庫県教育委員会の道徳の研究指定を受けることとなった。研究テーマは『子どもたちの自尊感情を育む「励まし」と「対話」を基盤にした道徳授業研究』である。兵庫県教育委員会が発行している道徳副読本「心シリーズ」の活用研究も行う。

本実践は、4年生を担当する私自身が「励まし」と「対話」を基盤に、道徳科の授業研究の試行錯誤を繰り返した実践記録である。



(2) 「励まし」と「対話」の大切さ

自尊感情を育む道徳の授業の展開を考える中で重要になるのが子どもへの「励まし」である。5月に龍神美和先生（豊能町立東ときわ台小）による模擬授業を私のクラス（4年1組）で行ってもらった機会を得た。模擬授業をみて私が印象を受けたのは、子どもたちが自分の意見を言いたくなる仕掛けがたくさんちりばめられていたことだった。「友だちが発表したら拍手をしようね！」と指示。意見を発表した子どもたちがみんなに拍手（反応）されてうれしそうな姿が印象的だった。いきいきと学習する子どもたちの姿。教師が子どもの意見にしっかり耳を傾け「反応する」、「共感の声をかけをする」などを意識することによって、子どもの心に「安心して発言できる」、そして「自分の意見の表明ができたという自信」が生まれる。教師や友だちの「励まし」によって授業に参加した子どもたちは「道徳の授業が楽しい」と感じ、ひいては自尊感情を高める。

る機会になるのではないだろうか。

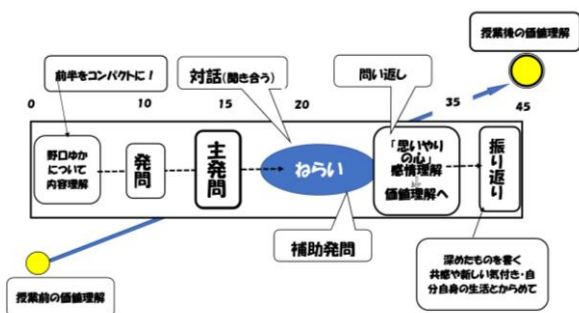
もう一つのキーワードとして考えたのが「対話」である。子どもの様子を見ていると、発言意欲は高いものの「単語のみの発言」が多く、「他者の考えをじっくり聞くこと」、「つなげて話を深めること」等の苦手意識をもつ実態がある。また、一部の発言力がある子のみが活躍してしまう授業となっていることもある。そのような展開なども改めなければならない。道徳の授業では、「対話」を基盤にすえ、他の人と「対話」をする中で自分の考えを深めたり、他者の考えから新しい気づきを得たりすることができる考えた。

(3) お茶の水女子大附属小学校での学び

6月には、「てつがく」を中心とした先進的な取り組みを実践しているお茶の水女子大附属小学校へ視察に行った。「てつがく科」の授業を支える授業形態が「サークル対話」というものだ。サークルでは、児童が一つの輪になり、隣の子と肌が触れ合いつつ、顔が見える形で進められる。その中で、自分の思ったことや感じたことを安心して語り、一人ひとりがそれを受け止める関係性ができていることにとても驚いた。また、「同じです」「わかりません」といった言葉が出てこず、一人ひとりが自分の意見をしっかりと持っていた。教師もサークルの中に座り、子どもたちの話し合いを聞きながら、話を整理している姿が印象的だった。この視察を通して、「対話」について改めて考え直すことができた。

3. 実践の手立て

(1) 「導入」「教材の提示」「発問」の見直し



導入は3分以内に収め、短く効果的な導入にする。(板書や資料の活用、短く伝わりやすい言葉など)教材の提示は、教材分の読み取りや登場人物の心情を細かく把握することが目的ではない。したがって、事前読みを行ったり、資料や場面絵、登場人物の関係性が分かる掲示物を作成したりすることで、話の内容を確認する時間を短縮し、前半をコンパクトにおさえる。

発問は、授業の流れを逆算して考える。授業のねらいは、いくつか考えられるものから、1つのねらいにしぼって深く追求することに重きを置く。また、主発問は遅くても開始20分までには入れるように心掛ける。

(2) 子どもの発言を受け止め広げていく

どんな意見に対しても決して否定せず、「なるほど」「確かにその考えもあるね」などと子どもの発言を受け止め、なぜそう考えたのか、理由や根拠を大切にす。また、発言する子どもが偏らないように、子どもの考えや疑問について「他の人はどう思う?」「～さんの言っていることってどういうこと?」「～さんの考えにつなげてどうですか?」「他に考えはありませんか?」など、子どもたち同士の対話をつなぎ、考えを広げていく。

(3) 話し合いを深めるための問い返し

子どもたちの発言にしっかりと耳を傾けて心で聴く。そうすることで、もう少し聴いてみたいものが見えてくる。「何を言いたいのか」「抽象的な言葉を使っているが、この子はどのように捉えているか」「もっと詳しく聴きたい」と思うところを問い返す。例えば、「やさしいってどういうこと?」「やさしいと親切は同じ?」「すごいこと言ったね。思いやりって何だろう?」「彼女にとって子どもの笑顔は何だったのかな?」など、道徳的価値に迫ったり深めたりするための問い返しをし、子どもの心に揺さぶりをかける。

4. 授業実践に向けて

(1) 日々の取組

① 授業前に伝えていたこと

授業が始まる前に、「教室はまちがうところ」であることを常に伝えるようにしていた。きれいごとはいらず、本音で話し合いがしたいことや、友だちの考えに対して自分がどう思ったか反応してほしいということも伝えていた。

② 「共感」「励まし」

子どもの発言に対してあたたかい言葉でかえしていた。「いいね」「なるほど～!」「おもしろい考えだね」など。また、学校生活の中で、子どもたちが努力して取り組んでいることや、責任をもって役割を果たしたときに、認める言葉がけや「ありがとう」という感謝の気持ちを積極的に伝えるようにしていた。

③ 子どもたちのよさの見える化・共有化

各教科の学習の振り返りでは、友だちの考えを聞いて共感したことや分かったこと、印象に残ったことな

どを書くようにしていた。また、1日の中でがんばっていた人（きらめき言動）を見つけたら、子どもたちが帰りの会で紹介したり、子どもたちの頑張っている姿を写真にとり、教室や学年掲示板に掲示したりしていた。このようなことを通して、お互いに認め合い励まし合う環境づくりを行ってきた。

④学習形態の工夫

対話がしやすいように、学級会で話し合うときは、サークル対話を用いたり、集中して課題に取り組むときは、二重のサークルにしたり、全体で授業を進めるときは、話し合いが活発になるよう、コの字型にしたりと、学習内容によって机の向きを柔軟に変えていた。



(2)「愛の人—野口ゆか—」(兵庫県徳御蔵本「きらめく」兵庫県教育委員会編)の授業化に向けて(4年生) 《教材の内容》

日本ではじめてめぐまれない子どもたちのために保育園を創設した野口ゆかが主人公(兵庫県出身)。小さい頃から困っている人を見ると、自分ができていることを考えて行動するゆか。両親の死後、父の「子どもはたからだ」という言葉を思い出し、自分が子どもたちの力になろうと決意する。そして、教育を受けることができなくて困っている子どもたちのために保育園を作り、幼児教育に一生をささげるという内容である。

《悩み、苦労した教材研究からみえたこと》

教材研究に苦労した。内容項目B「親切・思いやり」で扱うか、A「希望と勇気、努力と強い意志」なのか迷い、本教材の文章だけでは読み取れないところを知る作業からスタートすることを余儀なくされた。そこで、「野口ゆか」の生き方、業績、思想をまず自分自身が学ぶ必要があると考えた。「野口ゆか」に関する研究論文や日本幼児教育史の文献を読んでいった。大変な作業であったが、その中で改めて「野口ゆか」の功績とその偉大さに気づいていった。私の中で「野口ゆか」への見方が大きく変わるとともに、子どもたちにこの感動を伝えたいと強く思う瞬間だった。

授業計画を立てるにあたり、教材の内容が難しく登場人物や時代背景(大正時代)など子どもたちが理解しにくいと考え、事前に資料を読む時間をとり、本時ではスムーズに本題に入れるようにした。

5. 授業の実際

(1) 授業のねらいとして考えたこと

野口ゆかが保育園を創設した業績だけでなく、その根底となるゆかの幼少期から持ち続けた思いやりの心に目を向けさせる。そして、なぜ主人公が困っている人のために保育園を創設するに至ったのかを考えさせたい。野口ゆかの生き方を支えたものは、相手の立場に立って親切にしたいという思いやりの心であり、見返りを求めず、人のために行動することで結果として自分にも喜びがある。保育園を創設したことで、子どもたちの笑顔を見ることができ、それが生きる心の支えになり、自分のためだけでなく人のために行動することで、相手も自分もあたたかい気持ちになるということに気づかせたい。

(2) 授業展開

本時の実践の前に、教材を事前に読み、内容を把握するようにした。本時の流れは以下の通りである。

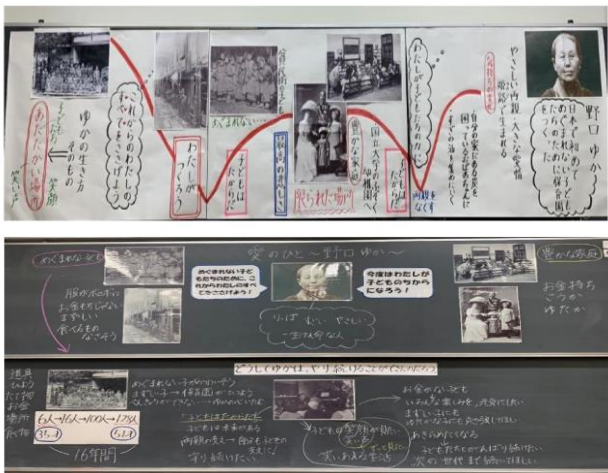
- ①野口ゆかの功績について知る。
- ②当時の暮らしの写真を活用して、貧富の差が激しかった時代背景について考える。(写真)
- ③めぐまれない子どもたちを目にして、保育園を作ろうと決意した主人公の気持ちを考える。
 - ・いつも両親が支えになってくれたように、自分も子どもの支えになりたい。
 - ・子どもは未来がある。まずいい子どもだけ学校にいけないのはかわいそうだと思ったから。
- ④保育園を作ってから人も人が集まらず、いろんな苦労があったが、どうして16年間も「ゆか」はやり続けることができたのかを考える。
 - ・困っている人を助けたという思いがあるから。
 - ・子どもの笑い声や笑顔をずっと見ていたい。
 - ・自分が勉強を教えた子どもたちが、次の子どもたちに教え、ずっと続いていってほしい。
- ⑤友だちの話を聞いて共感したことや心に残ったことを振り返りに書き、班の中で全員発表し交流する。

子どもの振り返り

・Kさんの「子どもの笑顔があったから続けられた」というところに共感しました。保育園を作り、子どもたちを幸せにしたいという気持ちがあふれていて、わ

たしはそれに感動しました。

・ゆかは周りをよく見ている、人の思いが分かる人だ
など思いました。なかなかーから保育園を作ろうと思
わないし、誰もがができることではないからです。ぼく
もみんなの笑顔を見ると元気になるから、未来にわた
って子どもの笑顔を見続けたいと思う気持ちをこれか
らの自分に取り入れたいと思いました。



(3) 成果

資料を使って導入を短くし、発問を厳選したことで、前半をコンパクトにおさえ、主発問を開始15分で入れることができた。じっくり考える時間がとれたので、ギャラリーウォークで他者とも交流し、自分の考えをより深めることができた。

子どもの発表に対して、どんな意見に対してもいろんなあたたかい言葉で常にかえすようにしたことで、今まで自分から手が挙がらなかった子が発表したり、ワークシートにたくさん書きこんだりしていた。また、友だちの意見に反応する子も多く、発表しにくい子にも「ここに書いてあるよ」とか「がんばれ!」とあたたかい言葉が聞こえてきた。

振り返りでは、「ぼくも見習いたい」「困っている人を助けたい」と書いている子どもも多く、自分のことに結びつけて考えていた。

(4) 課題

「思いやり」の価値理解について、子どもたちはなんとなくわかっていたので、全体交流の際に、「ゆかにとって子どもの笑顔は何だったのか」子どもから意見が出たときに、切り替えし補助発問があれば、さらにもう一段階深めることができた。主発問を「なぜ語り継がれている人なのだろう?」とすることで、「思いやり」について考えさせるのもおもしろい。また、「畏敬の念」として、自分の生活に落とし込むより、すてきだなと思うことでも自分を見つめることができる。

6. この取り組みからの学び

授業が終わった後も、余韻にひたり数人の子が黒板の前に来て、じっと見つめている姿が今でも忘れられない。以下、この取組を通しての学びである。

(1) 対話の仕方

いろいろな視点で物事を考えるには、対話的な学びを工夫することが大切だと感じた。子どもがどこでペアトークを求めているのかを考えて設定したり、なかなか自分の考えを書けないときは、ギャラリーウォークを取り入れたりとすることで周りの意見に触れ、考えを深めることができた。

(2) 自尊感情を育む「励まし」

子どもたちの発言を「いいねえ」「なるほど」と受容して、さらに問い続けていくことで、子ども自身が自分でもこんなことを考えていたのかと思えるような言葉が引き出される。その時にクラスの空気が一変して、どんどん考えが深まっていった。道徳授業において、教えることよりも、子どもの発言を受容し共に考え、悩みを共有する教師の姿勢が大切だと感じた。

(3) 板書の見える化

自分が授業をどのように構造したいか、板書から考え始めると、漠然としていたものが焦点化され、ねらいに迫りやすくなった。

(4) 授業記録の活用

授業記録を読み返すと、正解発言を求めて、期待している答えを言わせようとする雰囲気を感じた。授業を客観的に振り返り、具体的な改善の方向性を学年や学校全体で共有することで、授業力の向上につながると感じた。教師の発問、子どもの発表やつぶやきなどの授業の一部始終を記録した授業記録は、客観的な事実に基づいた授業を振り返るいい材料となった。

7. おわりに

「対話」と「励まし」を基盤に道徳授業の研究を進めてきた1年間。子どもたちが自分の考えを周りに受け止めてもらえることで、周りの考えをよく聞くようになり、自分の考えが変わったり、考えを深めたりする子どもたちの姿が多く見られた。また、子どもたちが道徳の授業を面白い、楽しいと感じるためには、中心発問の吟味は非常に重要であると改めて感じた。

今後も実践を積み重ね、子どもの心をゆさぶり、「納得」と「発見」のある道徳科の授業を目指してさらに研究を深めていきたい。